トップニュース

「人に寄り添う人を育てたい」

筑女大が能登支援

宗門校の筑紫女学園大学（福岡県太宰府市）は、「人に寄り添う人を育てたい」という願いのもと、東日本大震災に続いて、大学として能登半島地震の被災地支援に取り組もうと、学内から学生ボランティアを募集。14人の学生が8月26日から29日まで、石川県の能登町、七尾市能登島の仮設住宅や集会所を訪れ、炊き出しなどを通じて被災者と交流した。

能登半島地震の被災地でのボランティア活動はこれまで、同大学現代社会学部の栗山俊之教授（福岡市博多区・覚永寺住職）のゼミ生を中心に2回実施。この活動の報告会で、参加した学生が多くの学びを語ったことから、同大学は、学内挙げての被災地支援活動に広げることに決めた。

全学生が所有する共有アプリでボランティア参加を呼びかけ、応募者25人から抽選で8人を選出。同ゼミ生6人とともに支援活動に携わった。学生14人は引率の栗山教授、事務職員3人とともに、26日に福岡から空路で石川入り。金沢別院内（金沢市）に設置する宗派の能登半島地震支援センターに宿泊して活動した。

同センターのスタッフの案内で被災地を見学。輪島市、能登町などを訪ね、倒壊したままのビルや家屋や、段差や亀裂が入る道路などを目の当たりにした。初めて被災地を訪れた学生らは震災発生から8カ月経ってもなお、復旧・復興が思うように進まない被災地の現状に心を痛めた。

27、28日には2カ所で炊き出し。27日は能登町役場内浦総合支所の調理場などで調理。九州の名産を使った明太冷やし茶漬け、梅ひじきおにぎり、だご汁など200食分の食事を同町松波地区の仮設住宅で暮らす被災者に振る舞った（写真上）。28日には、3回目の訪問となる七尾市能登島のえの目多目的集会所で「居酒屋筑女」をオープン。「より多くの人に参加してもらえるように。そして、お酒を飲みながら本音で語り合ってもらいたい」と「居酒屋」と銘打って、焼き鳥や餃子、焼き明太子などと一緒に初めてアルコールも提供した。参加者の中には若い世代の姿も見られ、住民と学生は語り合い、交流を深めた（写真下）。

公募で参加した現代社会学部3年の山新田歩実さんは「初めて訪れ、倒れたままの家屋などを見た。被災者の方から『もう8カ月も経ったので復興が進んでいると思われているかもしれないが、実際はこうしたつらい現実が続いている』と聞き、胸が痛んだ。こうした思いを家族や学友など周りの人たちに伝え、先が見えない被災者の方たちの不安に寄り添いたい」と話した。

3月に続いて2回目の参加という同ゼミの池田愛唯さん(4年)は「えの目の集会所で被災者の方たちと5カ月ぶりに再会した。前回は挨拶程度で終わってしまったが、今回はじっくりと話を聞くことができた。仮設住宅で1人暮らしする60代の女性は、隣近所の目が気になり、窓もカーテンも開けられないと、大変な状況を語られた。それにもかかわらず、私たちをねぎらい、訪問に感謝の言葉を口にされる姿に胸が熱くなった。苦労されている被災者の方々のことを忘れることなく、これからも支援を続けていきたい」と語った。

同大学はこれまでも、東日本大震災、熊本地震や九州北部豪雨の被災地支援などを継続的に行っている。その発端となったのは東日本大震災の支援活動。震災翌年の2012年にスタートし、これまで29回、延べ約300人の学生が被災地を訪ね、炊き出しや被災者との交流を行ってきた。現在も毎年1回、訪問を続けている。

当初から支援活動に携わり、今回の能登半島地震の被災地支援でも、ゼミ生たちとともに中心的な役割を担っている栗山教授は「人のつながりが生まれることで、相手に元気を与えるだけでなく、私たちも元気をいただくことができる。今回の活動で、それが活動の継続をもたらすということを再確認できた。いつ、どこで、どのような規模の災害が起きてもおかしくない地理的条件のもとで暮らしている私たちだから、『支える・支えられる』という関係が、今にもまして当たり前になっていくようにと願っている」と語り、継続的な活動を誓った。

「感謝の言葉いただき胸が熱くなった」

震災から何を学ぶか

高岡・氷見東組　門徒推進員が学習会

「震災と私たち―災害によってあきらかになったこと」をテーマに、能登半島地震で被害を受けた高岡教区氷見東組（富山県氷見市の14カ寺）の門徒推進員連絡協議会が9月10日、同市・妙願寺で学習会を実施した。震災の現地学習会を計画していた富山教区寺族婦人会との合同開催とし、近隣の氷見、氷見西両組の門徒推進員にも呼びかけた。参加者36人は、震災の事実をどう受け止め、何ができるのかを考えた（写真）。

連研中央講師の林史樹さん（高岡市・要願寺住職）が自身の被災体験を交えて講演。「被害の程度を比較する中で語られる言葉は、人を傷つけ、自分自身も傷つけられる」「『大丈夫？』『がんばろう』などの声かけもまた、被災者を傷つける場合がある」と指摘。「支援する(助ける)人・支援される(助けられる)人と線引きをするのではなく、『助かりあって』生きていくことが大切」と語ったほか、「募金や物資の提供はもちろん、支援を必要とする場所での人と人とをつなぐ活動や、思いを馳せること、忘れないことも私たちにできる支援」と述べた。

全体協議会では、参加者から「お寺の『尼お講』を通した人と人とのつながりが地域の相互扶助の役割を担っており、今回の地震災害でも迅速な応急的措置ができた」「本堂に避難を求められたが、耐震の問題もあり、受け入れることができなかった。今後はこの課題を考えるとともに、地域住民との心のつながりが大切なことを痛感した」など、震災体験を通した意見が出された。

氷見東組門徒推進員連絡協議会は、1月1日に発生し、いまだ復興が見えない能登半島地震災害から「見えてきたもの、学ばねばならないこと」について学びを深めていきたいとの思いで同学習会を企画した。

武蔵野大学が「元気が出る」スクールソング

「学びの旅は　果てしなく　歴史を越えて　希望の光に　高鳴る鼓動　突き進め　この瞬間を♪」。

今年創立100周年を迎えた宗門校の学校法人武蔵野大学(東京)が、記念プロジェクトの一環として、スクールソング「君の花咲かせて」を制作した。

学生参画型のイベントとして、同法人全ての設置校から学生・生徒や教員が参画。昨年9月に「元気が出る応援歌」というテーマのもと、武蔵野大学中学・高校の生徒が作詞のワークショップを行い、257作品、3799フレーズにおよぶ歌詞の原案を作成。曲は昨年12月に武蔵野大学の学生が学部を越えて集まり、ワークショップを重ねて作成。同大学非常勤講師で、作曲家の鈴木真理さんが編曲し、候補となる3曲を完成させた。この中から学生・生徒の投票で曲を決定した。「君の花咲かせて」というタイトルには「学校生活で得た学びや思いを糧に、学生・生徒・園児一人一人の夢や幸せが花開くように」という願いが込められている。

7月21日には同校創立の地・築地本願寺の聞法ホールで歌声を収録した。同大学のルンビニー合唱団とOG、同中高の合唱部・ブラスバンド部から生徒が参加し、熱のこもった歌唱を披露した(写真)。

音源は同大学公式サイトで公開中。

本願寺新報
hongwanji journal

10月10日(木曜日)

毎月1日・10日・20日発行

発行所　本願寺新報社
京都市下京区堀川通花屋町下ル　浄土真宗本願寺派（西本願寺）
〒600-8501　本願寺出版社内
電話 075(371)4171(代) ／ FAX075(341)7753

寺院仏閣のトータルプランナー
株式会社 あいその
株式会社 あいその寺社ラボ
オリジナル納骨壇・本堂仏具工事・寺院設計・建築及び資産法規御相談
福岡市早良区曙２丁目７番13号
https://www.aizono.co.jp/
0120-168-940（フリーダイヤル）

私たちのちかい

一、自分の殻に閉じこもることなく
穏やかな顔と優しい言葉を大切にします
微笑み語りかける仏さまのように

一、むさぼり、いかり、おろかさに流されず
しなやかな心と振る舞いを心がけます
心安らかな仏さまのように

一、自分だけを大事にすることなく
人と喜びや悲しみを分かち合います
慈悲に満ちみちた仏さまのように

一、生かされていることに気づき
日々に精一杯つとめます
人びとの救いに尽くす仏さまのように

赤光 白光

戦時下の金属供出で釣鐘を失った自坊の鐘楼はほどなく解体されたのだと、長年思い込んでいた。しかし、実際は戦後もしばらくは身を軽くしたまま、〝主〟の帰りを待ち続けていたという。いよいよ力尽きたのは昭和25年。四国や近畿を襲った「ジェーン台風」によって柱が折れ、傾いたそうだ。

▼当時10歳だった伯母から「本堂にもたれるようにして倒れかかっていたのを覚えている」と鐘楼の最後の姿を聞いたのは、先日の彼岸会でのことだった。さらに年配のご門徒は、戦争に取られた釣鐘は横倒しにされ、板を敷いてゴロゴロと転がしながら運ばれていったと聞かせてくれた。それは伯母にとっても初耳のことだったようで、「体験を聞く」ということの意味をあらためて考えさせられた。

▼この夏、若者に東日本大震災の記憶を伝えたいと宗派が実施した「大震災の伝承 スタディーツアー」に14歳の息子と参加した。これまでに何度も取材で訪れた地を共に巡る希少な機会。被災地の人から預かった言葉を少しでも共有したいと思ったからだ。

▼資料に目を落とす息子の隣で、かつて現地を訪ねた時に見聞きした話をすると、普段は歩幅の大きい彼が歩を合わすようにして真剣なまなざしを向けてきた。彼もまた現地に来て、「聞く」ことの大切さに触れたのかもしれない。ふとした昔話が得難い証言になることもあれば、求めて聞く中で伝える思いを心に刻むこともある。記憶や体験を次代につないでいくのは「人」。誰もが何かを聞き、語る人である。

福岡支局 〒812ー0002 福岡市博多区空港前 3-9-16 善教寺内
電話 092(621)5163/FAX092(621)9400
購読料 1部120円(年間4,080円) 定期休刊 7月10日、12月10日
浄土真宗本願寺派 代表電話
宗務所 075(371)5181／大谷本廟 075(531)4171

宗派公式Webサイト　https://www.hongwanji.or.jp
本願寺ホームページ　https://www.hongwanji.kyoto

旬の味覚にひとひらそえて。
京ゆば
湯葉弥
京・五条御前東　電話 〇七五ー三一四ー五七八八
http://www.yubaya.co.jp

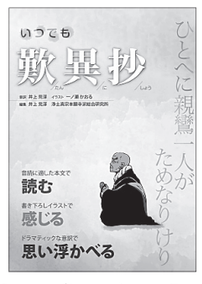
雅楽用打ち物・経切太鼓
その他宗教用太鼓一式製造元
修理などについてもお問い合わせ下さい

創業元禄初年
大笹屋
京都市左京区聖護院蓮華蔵町３６
TEL　075-751-6889
FAX　075-751-7304
E-mail:m@ozasaya.com

施設管理は、
オリックス・ファシリティーズ株式会社
本店
〒600・8385
京都府京都市下京区大宮通仏光寺下る五坊大宮町９９
TEL 075・841・7550（代表）
FAX 075・841・7666

香 薫玉堂 KUNGYOKUDO
伽羅・沈香・線香・匂い袋
香老舗 創業文禄三年（1594年）
薫玉堂
〒600-8349
京都市下京区堀川通西本願寺前
電話（075）371－0162

藪内流の茶道精神
正直　清浄
禮和　質朴
すなほなる　心をうつすわざなれば
手つきまがらず　すなおなるべし
茶道 藪内家燕庵
家　元　京都市下京区西洞院正面下ル　☎(075)343-0215
藪内家燕庵HP http://www.yabunouchi-ennan.or.jp


意訳◆井上 見淳
イラスト◆一ノ瀬 かおる
B5判／100頁 770円(税込)
いつでも
歎異抄
ひとりに親鸞一人がためなりけり
読む
感じる
思い浮かべる
いつでも
歎異抄
『歎異抄』原文の力強さ。臨場感あふれる「現代語訳」。ユニークで繊細なイラスト。『歎異抄』の魅力を余すことなく詰め込んだ1冊となっています。
本願寺出版社
0120-464-583 FAX075-341-7753
〒600-8501 京都市下京区堀川通花屋町下ル(西本願寺)
https://hongwanji-shuppan.com/
発送梱包手数料別(税込3,000円以上は無料)